

令和7年度 奈良県知事賞

税と私たちの未来

奈良県立商業高等学校 1年 中西 崇介

「税」と聞いて、皆さんはどんなイメージを持つだろうか。正直なところ、私は以前まで「税金なんて大人になったら払う面倒なもの」という程度の認識しかなかった。しかし、高校で社会科の授業を受けるうちに、税が単なる義務ではなく、私たちの社会を支える重要な仕組みであることを知った。そして今では、「税のあり方」や「納税者としての責任」についても考えるようになった。

私たちが日常的に使っている公共サービスや施設、例えば道路や信号機、学校、図書館、消防署、病院などは、すべて税金によって支えられている。特に日本の教育制度では、小中学校の教育は義務教育として無償で提供されており、その運営費用の多くも税金から支出されている。私が今、安心して学び、成長することができているのも、見えないところで多くの人々が納めた税金のおかげだ。

また、税金は災害時にも大きな役割を果たす。地震や豪雨など、自然災害が発生した際に、避難所の設置や支援物資の配布、被災地の復旧活動が迅速に行われるのは、日頃から税金によって体制が整えられているからだ。税は、私たちの「もしも」に備える、社会全体の保険のようなものだとも言える。

一方で、税金には課題もある。例えば、日本では少子高齢化が進んでおり、今後、医療や介護にかかる費用がさらに増えると予想されている。それに伴い、働く世代の負担が重くなる可能性がある。現状でも、消費税は10%と高く、家計に影響を与えている。若い世代として、将来私たちがどれほどの税負担を担うのか、そしてそれがどのように使われるのかは、決して他人事ではない。

さらに、税の使い道についても透明性が求められている。私たちが納めた税金が、政治家や行政によって適切に使われているのかをチェックする視点は、今後の社会にとって非常に重要だ。不正や無駄遣いがあれば、それは国民の信頼を失うことにつながる。だからこそ、私たち若い世代も、政治や社会の仕組みにもっと関心を持ち、自分たちの声を反映させていく必要がある。

将来、私も働くようになれば納税者となる。そのとき、単に「義務だから払う」のではなく、「社会の一員として責任を果たす」ことに意義を感じられるようになりたい。そのためにも、今のうちから税について正しく理解し、自分の生活とどのように関わっているかを学ぶことが大切だと思う。

税金は、国や地域を支える財源であると同時に、私たちの暮らしを守り、未来をつくる原動力だ。誰かが払ってくれるものではなく、私たち一人ひとりが支えるべき「社会の土台」である。税の重みを理解し、賢く納税し、正しく使われる社会を築くこと。それが、これからの私たちに求められる姿勢なのだと感じている。